
剣の名の下に...

時政

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の名の下に…

【Nコード】

N5308D

【作者名】

時政

【あらすじ】

この世界ルナティックワールドに生息する魔物を討伐する部隊、桜花煉檄に入隊するために建設された学園で生活する日々……だが一人の女性によってその日々が砕け散る…

シャピトル1：桜舞い散る中で

桜が舞い散り春の日溜まりが続くなか

血に染められた細身の剣を前方に刺し、悲しみに染められた紅い瞳をし、黒い髪を風に靡かせながら立つ17、8の青い制服を着た男性を取り囲むように無数の屍が散らばっていた

その男の下に同じ制服を着た淡い茶色のロングヘアの女性が屍を器用にかわしながらたどり着くと敬礼をし、サファイアのような輝きを放つ瞳を向けた

「桜花部隊隊長、クレナイ紅殿に報告！！

蓮花部隊、銀杏部隊共にノルマを達成し、本部に帰還したとのこと！！

我々も直ちに帰還せよとの命令が下っております！！」

この男性の名は紅 クレナイ 炎時 エンジ

この世界ルナティックワールドに生息する魔物を討伐する部隊、ウカレンゲキ桜花煉檄に入隊するために建設された戦士養成学校3校の内1校に身を置く

「そうか…桜花部隊も直ちにレットローズラインに帰還する」

「了解しました」

女性は再び敬礼をしその場を後にした

先程の学園3校の名は紅が身を置く最も東に位置する、太陽が大陸を赤く染めることから名が付いたレットローズグランドにあるレットローズブライン

他にも、最も北にあるブルーローズグランドに位置するブルーローズブライン
西に位置するグリーンローズグランドにあるグリーンローズブラインだ

紅は前方の剣を抜き、空を切り剣に付いた血を払い飛ばし、腰にある鞘に収めて女性の後に続きその場を後にした

暫くすると小さな飛空艇にたどり着いた
その飛空艇は赤を主体とし、ツルをイメージさせるような金色の線があちこちにペイントさせた物だ

（今回の課題は下級インセクトモンスターであるビーンナイトを10体倒す事だ……）

ビーンナイトとは体長5センチの緑色の寄生型モンスターだ
主に死体に寄生し、人々に危害を加える

紅は飛空艇に入ると真っ先にコクピットに向かい一つ隔離された椅子に腰をかけた

船内は特に変わった様子はなく下に9人が各動力を動かす装置の持ち場があり、紅が居るのはその上に置かれた椅子だ

（モンスターの増加か…良く有ることだが今回は今までと何か違っ

たな…)

紅が一人考えている中、同じ制服を着た者達がそれぞれの席に付き飛空艇を発信させるため各機能を起動させていた

「隊長、準備がととのいました!!」

一人の男性が紅の下まで来ると、右手を額にあてて敬礼をしながら報告をした

「そうか、なら直ぐレットローズブラインへ向かってくれ」

「分かりました!!」

男性は回れ右をし、定位置に付くとパネルを操作しだした

「桜花部隊、紅 炎時。

ブラインに戻りしだい校長室に来るように」

レットローズブラインからの無線が入り、天井のスピーカーを通して皆の耳に入った

（校長室？

なんでまた…）

紅は腕を組み顔を斜め下に向けて考えた

紅が考えている間にも飛空艇は飛ぶ準備ができ、今すぐにも飛び立てる体制だ

シャピトル2：フレイムレオン

数時間が経ち、飛空艇は周りが山や森に囲まれた一つの大学のような所に付いた

飛空艇はその建物の裏手にあるヘリポートにエンジン音を響かせながら着陸した

紅は皆が外に出た後に飛空艇から降り立った

「みんないるな…では解散とする」

「了解しました!!」

紅が外に出ると9人が横一列に整列しており

紅がそう言つと敬礼をしたのち、一人を残して去っていった

「校長室に呼ばれたわね。

何か悪い事をしたの？」

残っていたのはあの時報告を知らせに着た女性だ

その女性は少しクスクスと笑いながら歩き出した紅と共に歩きながら話しかけた

「べつに…」。

アオイ
葵程五月蠅い奴が呼ばれないのは不思議だな…」

女性の名は葵 アオイミズキ
水輝

紅の幼なじみで性格は明るく、クラスの中では人気者だ

「ムカつく言い方するわね!!」

人がせつかく心配してあげてるって言うのに!!」

「迷惑だ…」

それに対して紅はクラスの中でもあまり人とは関わらず一人であることが多い

クラスとはレトロースブラインで学年によって3クラスで分けられている

紅及び水輝は6・2で学園最高の学年だ

「あなたは変わらないわね本当に…」

水輝は急に静かになった

「関係ないだろ。」

「見た目格好いいんだから性格さえ直したら更にモテるのに…」

「悪かったな」

紅達が話してる間にいつのまにか学園の中にまで来ていた

「まったく……」

ああ〜!!」

突然大声を出した水輝は口に手をあてて驚いていた

紅は五月蠅いと言わんばかりに両耳に人差し指で耳の穴を塞ぎ、五月蠅いとアピールしていた

「騒がしい……何かあったのか？」

「あ、あそこ見てよ。」

進級した時に受けた筆記試験が貼つてあるのよ」

水輝は無理やり紅の裾を掴み中庭にある電子掲示板の所まで連れて行った

「順位はと……」

水輝は前かがみになり、指を掲示板に当てて探し出した

（どうでもいいが短いスカートでそのポーズはやめた方が良さと思うが……）

紅が呆れているなか水輝はまたまた驚いた様子で紅を見た

「あなた凄じじゃない!!」

おめでとう!!」

水輝が拍手すると同じく周りに群がっていた生徒達も拍手しだした

「一体何だつてんだ……」

紅は伝言板を上から順に眺めていった

そこには学年順位一位の所に紅の名が載っていた

「そう言うことが…」

紅は納得したかと思うとスタスタと校内に向かって歩き出した

「ちよつとどこに行くのよ!！」

水輝は慌てて紅の後を追った

「ふう…」

忘れたのか？

俺は校長室に行かなくてはならないんだ」

それを聞いた水輝はそうだったと言わんばかりに手のひらを胸の前でポンッと叩いた

（……付き合いきれんな……）

（校長室か……）

俺に一体何の用事があつて呼び出したんだ？

まあ、行けば分かることだが…）

紅達は校内に入った

校内はごく一般の大学と何ら変わらないが変わった所と言えば中央にある巨大なエレベーターに購買の他に武具を売っている所、各武器によって異なる訓練所くらいだ

「確か校長室は三階だったな」

紅は真っ直ぐ巨大エレベーターに向かった

校内は三階建てで

一階は先程出た購買と武具店に訓練所

二階は教室と図書室

三階は校長室となっている

地下もあるらしいが何があるのか生徒には知らされていない

そしてエレベーターに乗り込み移動した

「何でついてくるんだ…？」

水輝も付いてきていたようだ

「え…まあ気にしない気にしない」

（何しに来たんだコイツは…）

「校長室の扉の前までだ…」

「うん」

そしてエレベーターは三階に着き扉が開と

黒と黄色でまとめられた僧侶服を着て浅茶色の僧侶が如何にも被っ

ているだろうと言う帽子を被った男性がこちらに気づき近寄ってきた

「演習部隊で桜花部隊隊長だった紅 炎時か？」

「はい。」

「後ろの者は？」

その男は紅の背後にいる水輝に視線を向けた

（変に思われるのもやだしな…）

「怪我をしたらしくて、同じ部隊なので保健室まで付き添って行かなくてはならないのですが、用事があるので一緒に来てもらいここで待たせようかと」

「…そうか、この部屋で待ってなさい。」

紅は奥の部屋に私と来なさい」

男性は少し怪しんでいたが何とかなったようで紅を連れて奥の部屋に向かつていった

「来ました」

男性は茶色い扉を開けて中に紅を通した

開けた先に広がっていたのは普通の学校となんら変わらない校長室

だ
黒い皮のソファーに腰を下ろした人物が椅子を反転させ目の前のデスクに肘をおき手を組んで紅を見た
その男性の風貌は茶色いスーツに赤いネクタイ、白髪の間をすいてい

「君が紅 炎時君だね？」

渋い年寄り特有の話し方で質問した

「はい。」

紅は敬礼をした

「まあまあ、楽にしてください。
私の名前は知ってますね？」

話し方からして優しそうな人のようだ

「渋木 舞踊。
シンキフヨウ

この学園の校長であり総指揮官。」

「はは、良く分かってますね。」

「俺に何のようですか？」

紅は体制を楽しみ、質問をした

「そうでしたね。」

あなたはこれから聖獣フレイムレオンにあっていただきます。」

（聖獣フレイムレオン…この世界に住む聖獣の内一体…

全ての聖獣の場所は把握されてはいないが…

それに、個体としての能力も高いため近寄る事は容易ではないはずだが…何で俺が会わなくてはならないんだ？）

「何で俺が？」

一般の者はあえないはずでは…」

紅は考えていた事を渋木に言った

「確かにそうですね…

ですがあなたは各能力が高く、フレイムレオンに会っても害はないかもしれないし、使い手となる可能性は高いと考えた上でこう話してるのです」

渋木は熱弁した

（使い手……）

「日時は明日の朝6時。

水輝と共に学園から出て東に位置する火炎の森に集合です。」

（何で水輝も……？）

「何故水輝も何です？」

紅は思った事を素直に聞いた

「水輝は私の自慢の孫ですからね」

渋木は微笑ましく笑った

（理由になってないだら…

って孫？

知らなかった…）

紅が色々考えている内にも話は進んでいき終盤にさしかかっていた

「で、君は自分の武器を持ってますか？

学園からの支給品の剣ではないものを」

「一応ありますが、メンテナンス中です」

「そうですね、今日中には終わるでしょうから後で取りに行くと良いでしょう。

では明日は期待してますよ。」

渋木が笑顔で話終わると紅は敬礼をした後、回れ右をし部屋を出た

「何の話だったの？」

紅が出て来た所に水輝が近寄ってきて質問した

（少しは休ませろよ…）

「明日水輝と共に学園を出て東に位置する火炎の森に行くことになった」

紅は腕を組み疲れた様子で聞いた事を水輝に話した

「良いなあ…使い手かあ…」

「まだ決まったわけじゃないかな…」

羨ましがってる水輝に間髪いれずに言った

「そうだけだね。」

水輝と紅はエレベーターに乗り込んだ

「校長の孫だったのか？」

紅は疑問に思っていたことを聞いた

「うん、そうだよ」

水輝はさらりと言った。

（みんなは知ってるのか？）

紅達は一階に付くと武器屋に向かって行った

「おうっいらっしやい！！」

武器なら何でも揃ってるぜ！！」

ちょっと小太りな中年の男性が頭にゴーグルを付けた作業着姿をして、紅達を出迎えた

店は小さいが、武器などが沢山壁やらなにやらに置いてある事から品揃えは豊富なようだ

「メンテナンスに出した俺の剣を取りに来たんですが…」

紅は店先の小さなカウンターに近づき店主に聞いた

「あっ！！」

ついでに私のもお願いします、陣さん」

水輝は思い出したのか自分の武器も頼んだ

先程でた陣と言うのは店主の事だ

機粒 陣 《キリュウジン》

学園で武器屋をやっている

「はいよっ！！」

陣は水輝には淡い水色を主体として羽をイメージとした模様が描かれたリボルバー式の拳銃を渡した

そして紅には黒を主体とし、炎をイメージさせるかのような赤い模様が描かれており

刀身の根本に丸い穴の開いた片手剣を渡した

「他に何かいるもんはあるかい？」

陣は腕を組み、紅達に質問した

「そうだな……魔玉マギヨクの祈りと……」

「水の銃弾を下さい!!」

水輝は紅の言葉を遮りそう言った

「おい……人が注文して

「あいよっ!!」

陣は聞いた分だけとりあえず紅達に売った

（こいつといるとなにもできんな……）

紅は疲れ果てていた

そして、その後紅は追加注文をして望みの物を買った

買った物は魔玉の祈りの水バージョン

効果は魔法のウォーターウォールと同じで水の壁を作り出す戦士専用のアイテムだ

（翌日）

紅達は指示された場所に来ていた

「揃っているようですね……」

渋木がゆっくりと紅達の方へと向かってきた

「では、行きましようか」

紅と水輝は木が炎に纏われている森の奥地へと歩み始めた渋木の後を追って進み出した

「この森って燃えてるのにちっとも熱く無いどころか、触っても燃えやしない」

水輝は手で赤く燃えている木の葉を一枚ちぎり手に乗せてまじまじと見ていた

「この森の炎は特別らしいですからねえ」

渋木は笑っていた

「おじいちゃんは相変わらずのんきねえ……」

「水輝にそう言われるとは思いませんでしたよ」

渋木はまだ笑っていた

（後どれくらいで付くんだ？）

紅がそう考えている頃だった

目の前に三体の炎に包まれたワームがこちらに近付いてきていた

「あれはフレイムワームですね……」

フレイムワームとは自らの身を炎でまとい、度々火災騒動を起こす
下等モンスターだ

「ここは私が…」

水輝は銃に弾を込めて狙いを定め始めた

「待て…」

あいつ等は能力は大したことないが素早い…
よってここでは銃であるお前は不利だ」

紅はそう言っていると水輝を後方へ下がらせると、先日買った魔玉の祈り
を使いフレイムワーム三体を動けなくした

「今だ」

その合図を聞いた水輝は左から順に倒していった

フレイムワームは悲鳴をあげたかと思うとその場に倒れ込み、跡形
もなく消え去った

「お見事!!」

と、笑いながら洪木は拍手して木の陰から出て来た

(のんきなもんだな…)

「ねえ、何で魔法使わなかったの?」

と、水輝はひよこつと顔を紅の顔に近づけて質問した

（顔が近い…）

「この森は魔物が多く現れるんだ…
いちいち魔法を使っていたら身がもたん…」

紅はそれだけ言つと水輝の顔を手で押しどかして先に歩き出した
木の後を追つた

話にも出てきたがこの世界には魔法が存在する
種類は4つと少ないが、一つ一つの種類の中にまた細かく分かれて
いるため量は果てしなく多い

中には禁止されている闇魔法も存在している

「あなたは何系の魔法が得意なんだっけ？」

（答えなきゃいけないのか？）

紅は視線を一度水輝に向け、元の位置に視線を戻すと洪水も気にな
るのかこちらに耳を傾けていた

（やっぱり答えなきゃいけないのか…）

「炎だ…」

紅はやれやれと言っ感じだった

「やっぱりねっ!!
私は水と白魔法」

水輝はキャッキャと騒いでいた

（やっぱりってなんだよ…

聞いてないのに話すし、テンションも高い……

朝からよく元気だなこいつは）

紅は疲れた表情だった

（フレイムレオンか……

やはり闘うのか？

だったら俺は不利になるな…

剣が効けばいいが…）

紅は眉間に皺を寄せ、歩いている間ずっと考えていた

「着きましたよ」

く炎の洞窟く

「さ、入りますよ」

渋木は先頭をきつて中に入っていた

紅に水輝も後に続き暗闇の中に消えていった

洞窟の内部は炎系の魔物が複数生存し、先程現れたフレイムワーム

もその中に入る

そう言った魔物が巣くう中紅達は真っ直ぐ伸びた道を進み、突き当たりについた

そこはマグマが溜まり岩が重なった壁がドーム状にそのマグマ溜まりを包み込んでいた

「さ、水輝と私はしばらく此处で待機しましょう。
紅君は中に入りこれを中央に投げ入れてください」

渋木達はドームの入り口に立ち止まり、渋木は紅に手のひらサイズの赤いクリスタルを手渡した

「これは…？」

「炎の証です。

フレイムレオンと友好の証とも言えるでしょう。

まあ、後は投げ入れればフレイムレオンがはなしてくれるはずです」

紅は剣を確かめてから中に入っていた

（ここで良いんだよね？）

紅は先程受け取ったクリスタルを中央に投げ入れた

すると投げ入れた部分がぐつぐつと一部だけ激しく沸騰しだした

（なんだ？）

紅が視線を向けた先には鬣が赤く燃え、巨大な牙や額に生える角に全身が赤く燃え上がったライオンがその激しく沸騰していた所からマグマを垂らしながら飛び出して来た

（こいつが…フレイムレオンか…）

「我が名は炎の聖獣フレイムレオン…」

お前か？

我を呼んだのは…」

シャピトル3：逆巻く炎

「お前がフレイムレオンか……？」

紅は目の前に降り立ったフレイムレオンが顔を近づけて紅の顔を覗きこむようにしている体制で迫って来ているにも関わらず、微動だにもせず冷静に相手の事をそう言っただけで確かめた

「面白い…」

久しぶりに骨のあるガキではないか…」

フレイムレオンは口の端を吊り上げてニヤリと笑みを浮かべて続けた

「いかにも。」

我はフレイムレオン…

何度も言わせるなガキ…」

フレイムレオンは紅の周りを周回している

「で…我に一体何のようだ？」

そう聞かれた紅は昨日渋谷から聞いた事を手短かに話した

それを聞いたフレイムレオンは天井に向けて大きな高笑いをした

「我がお前の下部になるかも知れないと言ったのか。」

我を操れる程の実力もなさそうなのこのガキに対して!!」

（確かに。

だがガキガキ言われて不快だ。）

「まあいい…

ガキ…万が一我がお前の下部…つまり召還獣となったとして私の力を使って何を願う？」

（願い？

そんなもの俺にはない。

ただ流れるままに学園を卒業して桜花蓮檄に入り一生を魔物退治で終わらせる。

だから願いと言われても…）

「……願いなどない。」

紅は思った事を言った

「ぐあははは!!

願いなどないと。

人は何かしら願うものだ。

金持ちになりたい、奴を超えたい…人それぞれあるのだよ…
それがないと申すのか」

フレイムレオンは更に高笑いをした

紅は無言無表情でただその姿を見ていた

「まあいい。」

少しお前に興味を持ったわ…今から我が出す炎の化身と戦い、その化身を倒して見せよ…」

フレイムレオンはニヤリと笑みを放った

「倒したら召還獣として俺に従ってくれるのか？」

「さあな…どのみち勝てば分かることだ」

紅の質問にこたえと後方のマグマが溜まっている場所の上に浮遊し、瞼を静かに閉じると気を集中させ始めた

(…来る…！)

紅は剣を斜め下に構え、気を集中しているフレイムレオンに視線を向けた

すると逆巻く炎の柱が一本現れ、その炎の柱から赤い鎧を重装備し、真っ赤に燃える槍を片手に持った重騎士が紅の前へと降り立った

(上位召還獣コアナイト！？)

召還獣にも段階があり

下位 中位 上位 特級と言った感じに別れている

下位召還獣は小さく、学園に通っていれば楽に召還できる

中位召還獣は人と同じ大きさで、主に獣の姿が多く、召還できるのは学園でも上級生のみ

「さ…我に力を見せよ…」

そして目の前にいる上位召還獣コアナイト

上位召還は学園でも教師の中でも召還できる者が数少ない、とても召還が困難だと言われている

最後に特級召還獣…

聖獣の事をさし、未だかつて召還した者は愚か、従えた者すらいる
かないかと言うくらい極めて召還するのが難しい

（さて、どうするか…

俺が得意とする魔法は炎…そうになると魔法に頼ることは出来ない。
ここはこのブラスティックブレードで何とかするしかないか…）

紅の武器

ブラスティックブレードとはただの片手剣ではなく、魔力結晶という特別な結晶体を剣にある窪みに入れることにより様々な力を手に入れる不思議な力を秘めた剣なのだ

現在紅が所有する魔力結晶は一つ

ちなみに魔力結晶はこの世に二つしかない、種類は光と闇だ

紅は制服の内ポケットから光り輝くダイヤモンド型の物体を窪みに入れた

おそらく光の魔力結晶だろう

「ほう…魔力結晶体を扱うのか…珍しい…」

「……」

紅は下段に剣を構えたままコアナイトに突っ込んで行った

コアナイトは向かってくる紅に対し、左手を紅に向け炎の上位魔法
火炎竜を放った

竜の姿をした炎の柱は紅に向けて真っ直ぐ向かっていき直撃した

「……」

炎は何かに吸い込まれていき、無傷の紅が向かって行く姿のままだ
った

（光の結晶体は相手の魔法を無効にして防ぐ…
だから心置きなく上位魔法が放たれても突っ込んで行ける）

紅はコアナイトに一撃加えた

ぐら…

紅の一撃によりコアナイトは体制を崩したが、直ぐに立て直し宙に
浮いたままの紅に槍を真っ直ぐに突き刺しにかかった

「く…」

紅は剣を槍に対して右斜めに受け、そのまま左へ流した

（今だ…）

紅は地面に着地するとすぐさま受け流されてよろめいたコアナイト

の下に潜り込み、下から上に向けて飛び上がりながら剣を突き立て真つ二つにした

（終わりだ…）

紅が着地すると真つ二つになったコアナイトは炎に包まれ、消え去った

「なかなかやるではないか…」

フレイムレオンは紅の背後に降りたつとそう言った

紅はブラスティックブレードを腰のベルトに装着させてから振り向いた

「で…俺の召還獣になってくれるのか？」

「まだまだ…魔力結晶体を扱う者は珍しい…いや、お前だけだろう。それを扱える者などいなかった…」

久しぶりに血が騒いだ…我と戦い勝利せよ。

無論、お前が勝てば我はお前の召還獣となってやる」

フレイムレオンは火の粉をまき散らせながら火炎の翼を羽ばたかせ、やる気満々だ

（やはり戦うことになったか…）

先程の上級召還獣とは比べ物にならないくらい強い…

勝ち目はあるのか？

いや、勝つ…！）

紅はブラスティックブレードをフレイムレオン目掛け構えた

「やる気になったか…

我を楽しませてくれよ…

紅 炎時…」

「……」

（まずは相手の出方をうかがうのが適切だな…）

紅は剣の平面部分をフレイムレオンに向けて両手で剣を持ち、防御の姿勢になった

「まずは出方をうかがうか…」

確かに能力のわからぬ相手に対してとる行動としてはあっている。

だが、我に対してそれは愚かな行動と言えよう！！」

フレイムレオンは紅目掛け突進した

紅は左へ重心をずらし回避すると脇腹目掛けブラスティックブレードを叩き込もうとした

「聞かぬ！！」

フレイムレオンは翼を羽ばたかせ紅の頭上に飛び上がりかわすと急降下し右爪で紅を壁に叩きつけた

「がつ…」

紅は口の中を切ったのか叩きつけられ壁にひびが入り石のかけらが

パラパラと落ちる中、口から血を垂らしておりかなりのダメージを負ったように見える

(く……早い上に力も強い…)

フレイムレオンは足を紅からどかした
すると紅はその場に倒れ込むかのように膝をついた

「どうした？もう終わりか？」

フレイムレオンは翼を羽ばたかせまだまだ楽しませろと言わんばかりだった

「……………」

紅はゆらりと立ち上がりプラスチックブレードを強く握り締め、
フレイムレオンに向かって行った

「ほう…
そうこなくてはな…」

フレイムレオンは意識を集中させその身を火炎に包み込み上位魔法
火炎竜を連発させた

その火炎竜は紅に向かって行った

「この数ならその光の魔力結晶体だけでは防ぎきれぬであろう…」
フレイムレオンはニヤリと笑みを浮かべた

「そう悠長にしていられるのも今のうちだ」

「なに！？」

フレイムレオンの背後には紅が悠々と欠伸をしながらたっているではないか

フレイムレオンは体を反転させて紅の方向に向く

（何時のまに…）

そろそろ火炎竜があたりだろーと思われる方向に少し振り返ってみるが

「そういうことか…」

そこには確かに紅がいた

いや、紅の分身がだ

その分身は火炎竜をもろにくらい、ジュワツと水が激しく蒸発する音と共に消え去った

「水の造形魔法で俺自身を作り上げ、その分身の影に隠れつつ走りながらあんたが火炎竜を発動させた時に風魔法…本来は攻撃魔法であるウインドスピアを威力を下げて三連続で自信の背中に向けて放ちあんたの背後に回ったって訳だ」

ウインドスピア…

本来は風のが槍のように相手突き刺す中位魔法だ

フレイムレオンは翼を羽ばたかし、後方へと飛ぶ

「魔法を上手く使いこなせるようだな…」

「本来の使い方にこだわるのが嫌いでな」

ため息をはきながらそう言う紅

「そちらの方が良い…」

最近は本来の使い方しか使わぬ頭の堅い奴らが増えた…」

「それは誉めてくれているのか…？
なら礼は言う」

それを聞いたフレイムレオンは豪快に笑いだした

（何だ？

急に…

それよりだ…あの魔法の連発は厄介だな…背後に回って倒そうと思
ったが翼がやすみなく羽ばたいているせいで火の粉が舞ちり近づく
ことすらできなかった…

正面からしか無いか…）

「さあ…我をもつと楽しませろ！！」

フレイムレオンは上位魔法を発動させながら紅へと突進を仕掛けて

くる

（一か八か！！）

紅は懷から昨日購入しておいた魔王の祈りを目の前に投げつける

投げつけられた場所からは天井にまで届かんとばかりの物凄い水の量の壁が出来上がり、フレイムレオンはやむ終えなく急停止をする

「こんな小細工は我にはきかぬ！！」

一度息を大きく吸い込み吐き出すとともに並以上の威力はあるだろう火炎を水の壁にむけて放射する

無論大量の水が一気に蒸発したのだから周りは霧が覆うように白い世界となっていた

（今だ…）

その世界に包まれたフレイムレオンの下から紅は更なる上空へと蹴り上げ、更に思いもしない出来事に無防備の状態で蹴り上げられたフレイムレオンを追撃し下から脇腹へとひと蹴り、そしてとどめにフレイムレオンの上にまわりかかと落としをくらわせ地面へと叩き付ける

「がはっ…」

「倒したか…？」

紅は息を荒げながら地上に着地すると跪き横たわったままのフレイムレオンを見る

「正直ここまでやるとは思わなかったわ…」

（しぶとい…）

紅は立ち上がりブラスティックブレードを斜め下に再び構える

「そう構えるな。」

我はもう戦う気はない。」

それを聞き紅は腰にブラスティックブレードを挿した

「なら、俺の召還獣になってくれるんだな？」

フレイムレオンはゆっくりと立ち上がり

「ああ。」

渋谷が他の奴を呼んだ時点で従えなければならぬ約束だったしな」

（……………）

「元契約者だ。」

呆気にとられている紅に対して更なる追い討ちをくらわしたフレイムレオンだった

「まあいい、さっさと契約をかわすぞ」

紅はシンプルな指輪を右中指にはめてフレイムレオンにむけて差し出す

「さて、その前に話すことがある」

「話すことだと…？」

紅は手をもとに戻し耳をかたむける

「我等、聖獣と呼ばれるようになったのはかなり昔の事だ。

本来この世界にはいてはならぬ存在であつた我等だが、世の理が崩れ始め…いや、崩した者がいる。

その者は何故そのようなことをしたのかは分からぬが、そ奴が何か起こそうとしているのは確かだ。

今は気にすることはない…だがいずれお前に関わってくることだ。聖獣を従えるものとして。」

（厄介ことはごめんだ…）

「何か言いたそうだな？」

「厄介ことはごめんだ…」

それを聞いたフレイムレオンはと言うと高らかに笑い紅の近くまで

歩み寄る

「さあ、我と契約を」

(……言われるまでもない)

紅は再び指輪をフレイムレオンに向けて

「女神ルナの名の下に

我、紅炎時は聖獣フレイムレオンを我が召還獣として契約する。」

言い終わると共に二人の地面に赤い魔法陣が広がり逆巻く炎に包まれた

(…契約成立だな)

「こら、我を置いて行く気が主殿!!」

(なんだ?)

その場を後にしようとした紅を呼びかける可愛らしい声がその声のする方には

「どういうことだ…」

その場には小さなライオンに小さな角一歩、小さな赤い羽が生えた可愛らしい小動物が

「我等聖獣は契約を交わしたらこの姿になるのだ。契約成立の証にちゃんと指輪も変化しておろう」

紅は指輪を見る

確かに先ほどと違いライオンのデザインを施した指輪になっている

召還獣は契約主の指輪から呼び出されるのだ

だが聖獣は普通とは異なり、力だけを封じ込められて本体は小さくなつたまま地上にいられるとのこと

「…まあ、行くぞ」

「ま、待たぬかー!!」

スタスタと歩いて行く後ろをパタパタと飛びあとをついつ行くフレ
イムレオンだった

（葵の反応が…めんどうだ）

そして葵達のもとに戻った時予想通りの出来事が

「か、かわいいー!!」

紅の頭の上にちょこんと乗っているフレームレオンをキラキラした
目で見たり、つんつんとつついたりしてはしゃいでいるのだ

「ねえねえこのかわいいのなに? なに?」

「小娘、我に気安く触るでない!!」

「その態度もかわいい〜」

（人の頭の上で騒ぐな…）

「ねえ抱っこしていい？ いい？」

「好きにしろ」

紅の了解を得た葵はフレイムレオンを思いっきり抱きしめた

「あ、主殿酷いではないか！！

パートナーが困っているのだ。

早く我を助けぬか！！」

パートナーという言葉聞いた葵は顔の前まで抱き上げてじーっと
フレイムレオンを見つめる

「あなたもしかして…聖獣フレイムレオン？」

「その通り。

早く我を離さぬか」

「……………ええー！！」

数秒の間が空いた後葵はとてつもなく大きな声をあげたのだった

（騒がしい奴らだ）

「いやはや、お久しぶりですね。
フレームレオン。」

「その声は渋谷か…という事はこの小娘はあの泣き虫娘か」

抱き上げたまま石化している葵の手の中から顔だけをゆっくりと近
付いてきた渋谷へと向ける

「ええ、私の孫です。
さて、あなたがその姿だと言うことは…」

「契約をかわした」

「みたいですネ。
彼はどうです？」

無愛想ですが面白い能力の持ち主ですよ

「まあ、主殿が我等聖獣の行き先をどう導くか楽しみではあるな。」

「はは。だいぶ気に入ったみたいですネ。
紅君のことを。」

「な、何をいうか…！」

フレームレオンは何度かのチャレンジの後に葵の手から逃れ紅の頭
へと向かっていった。

（頼みましたよ紅君…）

こうして紅はフレイムレオンと言う炎の聖獣と契約をしたのだった
だがこの契約をきっかけに彼の旅は始まるのだが彼らはまだそれを
知らない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5308d/>

剣の名の下に...

2010年10月26日05時44分発行